

1960 夏山合宿

(7. 25~8. 4)

日吉ヶ丘高校山岳部

日吉ヶ丘高校山岳部が設立されて2年目で、私は山岳部長兼キャプテン(顧問は地学のY先生)にさせられ、京都の高校山岳界では実績はなかったが、何とかTOPクラスに立ちたいと思っていた。(2~3年後に京都府下のリーダー校になる)

そのきっかけのひとつは、日吉ヶ丘高校OBのI先輩が京大学士山岳会(AACK)として、ヒマラヤのチョゴリザ(7665m)初登攀に隊として参加し、我校に講演にきていただいたことが、若い私のハートに火をつけた。

毎日、部員は近くの稲荷山でトレーニングに励み、うさぎ跳び、腹筋、腕立伏せなど血の出るような訓練をした。

途中で、滝にうたれている老婆から、阪神タイガーズにいった「吉田義男」は猛訓練に耐え、あんた等は手ぬるいと励まされたこともあった。

構内では地下から4階まで何回も人間背かつぎをしたり、屋上から懸垂下降で降りたり、高度恐怖症になれるため、屋上のひさしで、足をブラブラしながら弁当を食べたこともある。

落下すれば、死亡か運がよければ重傷といったところである。

今なら、学校問題となるが、当時は誰からも注意をされず、我々も事故が起きてもすべて自己責任と思っており、親も学校を非難するようなことはなかった。

新入生は厳しい訓練に半数以上が入部2~3日で退部したが、体育会系ではマイナーと見られていたが、それでも5~6名が残った。

3年になれば、大学受験が控えているので、クラブ活動をやめる生徒がいる中、私は家族の反対を押し切り、学業は放棄して、夏山合宿計画に取り組んだ。

3年生部員はそれぞれ忙しく、参加は私一人となり、どうせやるなら北アルプスを最小の経費で縦走してやろうと、行程、装備、食糧計画など次の通り参画した。

共同装備については、山岳部の備品で、設営用品は米軍の放出品、食事関係は石油コンロ、コッヘル、鍋など今と違いかなり重かった。

食糧品は1日4食、朝と夕食は1人1食あたり米2合(360ml)の米を用意した。

副食もソーセージは魚肉、肉も自分たちで味噌漬を作るなどして、できるだけ安くつく

ように工夫した。

個人装備も、衣料品は今使用しているものを使い、特に登山用としては買わないように指導した。

皆が貧しい時代であり、その分、荷は重くなり、高校生には毎日の雨と共に、かなり、苦しい山行となった。

(期間と行程)

1960年7月24日～8月4日(11日間)

7月24日 京都＝(国鉄)＝

7月25日 富山＝千寿ヶ原⇄美女平＝弥陀ヶ原～天狗平～室堂(泊)

7月26日 室堂～立山～一の越～ザラ峠～五色ヶ原(泊)

7月27日 五色ヶ原～越中沢岳～スゴ乗越(泊)

7月28日 スゴ乗越～薬師岳～太郎平(泊)

7月29日 太郎平～北の俣岳～黒部五郎岳(泊)

7月31日 黒部五郎岳～三俣蓮華岳～双六岳～双六池(泊)

7月31日 双六池～槍沢岳～槍ヶ岳(泊)

8月1日 槍ヶ岳～槍沢～横尾～濁沢(泊)

8月2日 濁沢～奥穂岳～前穂岳～岳沢(泊)

8月3日 岳沢～上高地＝松本＝(国鉄)＝

8月4日 ＝京都～日吉ヶ丘高校(解散)

(メンバー)

リーダー 矢野 (卒業後 同志社大学)

記録担当 中村 (卒業後 大阪府立大学)

装備担当 辻 (卒業後 京都大学)

写真担当 若城 (卒業後 大阪工業大学)

食糧担当 川久保 (卒業後 京都府立大学)

気象担当 梅本 (卒業後 同志社大学)

衛生担当 森 (卒業後 同志社大学)

アドバイザー 高橋事務員

(天候)

7月26～28日は終日雨が降り、その他の日にも夕方には雨が降りうっとうしい日が続いた。

まったく1滴も降らなかったのは最終日の8月2日の穂高岳と帰途の上高地だけであった。